琉球大学学術リポジトリ

集団参加に苦手さのある自閉症スペクトラム障害児への支援：小学校の特別支援学級における自立活動の授業実践から

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター
	公開日: 2016-07-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 武田, 喜乃恵, Takeda, Kinoe
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34487

集団参加に苦手さのある自閉症スペクトラム障害児への支援

―小学校の特別支援学級における自立活動の授業実践から―

武田　喜乃恵[1)]

Support to the Child with Autistic Spectrum Disorder who has Difficulty in a Group Participation

:From Jirithu Kathudo of Educational Process in the Special Need Education Class of the Elementary School

Kinoe TAKEDA[1)]

要　約

琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センターのトータル支援教室は、子どもたちにとって楽しい体験、誰かと一緒に何かを共有する体験を積み重ねることを通して社会性の基礎を培うこと、自我の育ちを支えること、二次障害の予防・軽減を目的として行っている。

崎濱ら（2015）は、トータル支援教室における子どもと「楽しみを共有」する集団支援を学校現場において取り入れ、「遊びを主体とした集団活動」として自立活動に位置づけ実践し、教師と子どもの変容過程を考察した。教師の変容が、子どもたちの他者との関わりを活発にし、生き生きとした子どもたちの姿に繋がったと述べている。

以上のことから本研究では、小学校の特別支援学級で行った自立活動の授業で、集団参加に苦手さのある自閉症スペクトラム障害児が、どのような参加のかたちをとり、それに対して他者がどのような関わりをもったのか、その過程を明らかにすることを第一の目的とした。そして、授業の参加自体に難しさのある自閉症スペクトラム障害児にとってどのような参加のかたちを認めたり、関わったりすることが必要か考察することを第二の目的とした。

1．はじめに

人は人との関係の中で育つ。それは障害があってもなくても変わらない。自閉症スペクトラム障害のある子どもの場合、社会性の障害を中核とするために、「人との関係」でつまずくことが多い。そのため、参加すること自体に困難を抱えていたり、物事を共有することが難しかったりする。

これまで、筆者は琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センターのトータル支援教室において、発達障害のある子どもたちへの集団支援を行ってきた。集団支援では相互的な他者との関係性を重要視し、支援者の変容も含めた子どもの変容をみていくことを心がけている。そして、子どもたちにとって楽しい体験、誰かと一緒に何かを共有する体験を積み重ねることを通して社会性の基礎を培うこと、自我の育ちを支えること、二次障害の予防・軽減を目的として行っている。その支援教室に通う子どもたちの姿をみてきて、苦手なことに挑戦するようになったり、人を意識しやりとりが活発になったり、学校や家庭生活の中でも

1) Faculty of Education,Uni.of the Ryukyus

意欲的な姿がみられるようになったり、子どもたちがこの場を通して成長していることを支援者たちが実践をふりかえりながら確認してきた（浦崎ら ,2014；武田 ,2013）。

その実践の中から、武田（2015）は、競技性のある活動が苦手で集団の活動部屋に入りにくく、興味・関心を窓口にした個別的な関わりや活動を好んでいた広汎性発達障害のある子どもが、個別及び集団支援を通して、集団の中で人と一緒にいることが楽しいということを実感できるようになっていったこと、学校や家庭でも友だちとの関わりや興味・関心の世界も広がっていった事例を報告している。

また、崎濱ら（2015）は、トータル支援教室における子どもと「楽しみを共有」する集団支援を学校現場において取り入れ、特別支援学級及び通級指導教室の子ども達を対象に自立活動の視点を取り入れ「遊びを主体とした集団活動」として実践し、教師と子どもの変容過程を考察している。その中で、初めは、子ども達にルールに従うことや我慢して頑張らせるような関わりをしがちだった教師たちが、ネガティブに捉えていた子どもの言動が実はポジティブな側面を持っていたと気づいたり、ルールや構造の枠をゆるめ、間を持ったり、子どもたちの作り出す流れを尊重したりするようになり、そのことによって子どもたちが自分たちでルールを作り出し友達と遊ぶ姿がみられたり、学校へ行くことを楽しみにするようになったり、生き生きとした子どもたちの姿がみられるようになったと述べている。

ところで、特別支援学校の教育課程には、自立活動がある。2008 年、特別支援学校の教育要領・学習指導要領の「自立活動」の中に、新たに「人間関係の形成」という項目が追加された。自立活動の内容には、「健康の保持」、「心理的な安定」、「人間関係の形成」、「環境の把握」、「身体の動き」、「コミュニケーション」の６項目があるが、「人間関係の形成」は、発達障害のある子どもたちにとって特に必要な内容といえる。通常の学校でもこのような自立活動の視点を持って、授業を行うことは重要なことであると思われる。

以上のことから本研究では、小学校の特別支援学級で行った自立活動の授業で、集団参加に苦手さのある自閉症スペクトラム障害児が、どのような参加のかたちをとり、それに対して他者がどのような関わりをもったのか、その過程を明らかにすることを第一の目的とする。そして、授業の参加自体に難しさのある自閉症スペクトラム障害児にとってどのような参加のかたちを認めたり、関わったりすることが必要か考察することを第二の目的とする。

２．方法

（１）対象

小学５年生の自閉症スペクトラム障害のある男児、Ａ君。小学４年生の年末に医療機関で広汎性発達障害の診断を受けている。

絵を書くことが好きで、よく絵を書いている。怖い話や心霊現象などにも興味があり、自作の恐怖映像を撮影したり、怖い話をしたりすることもある。本を読むことも好きで、最近は特に偉人の伝記を好んでよく読んでいる。内容もよく覚えており、大人でも知らないような知識を知っていることも多い。話を聞いてくれる大人にやや一方的に話すことがある。交流学級に行く際や苦手な授業の際は、「嫌だ」と抵抗したり、本や絵を書けるものを持っていくこともある。「有罪」「死刑」と判決を下したり、死んだふりをしたり、自分のファンタジーの世界から人と関わりを持つことが多い。

祖父母の家などへ行ってもなかなか家やみんなのいる部屋に入れないことがある。

（２）授業の実施について

Ｂ小学校では、月曜日～木曜日までの１時間目に３クラスの特別支援学級が合同で自立活動をメインに位置づけた集団活動を行っていた。その授業の１コマの中で本授業を実施した。本授業は筆者と日頃Ｂ小学校に出向いて学生支援員をしている学生２名と授業の内容を検討し、授業案を作成した。事前に、Ｂ小学校の教師にも授業案をみてもらった。

授業は、学部４年生の女性学生支援者（以下、進行者Ａ）がメインで進め、筆者（以下、支援者Ｂ）と大学２年生の男子学生支援者（以下、支援者Ｃ）、特別支援学級担任のい組担任教諭（以下、担任Ａ）、ろ組の担任教諭（以下、担任Ｂ）、は組の担任教諭（以下、担任Ｃ）で実施した。また、ビデオを撮映する係の大学職員が１名いた。

（４）授業に参加した児童について

自閉症・情緒障害特別支援学級い組の子どもたちは、Ａ君（小５、男子）、Ｂ君（小３、男子）、Ｃ君（小６、男子）、Ｄ君（小６、男子）、Ｅ君（小４、男子）の５名が参加した。自閉症・情緒障害特別支援学級ろ組の子どもたちは、Ｆ君（小１、男子）、

Ｇ君（小１、男子）、Ｈさん（小３、女子）、Ｉさん（小３、女子）、Ｊさん（小２、女子）の４名が参加した。知的障害特別支援学級は組の子どもたちは、Ｋ君（小４、男子）、Ｌ君（小２、男子）の２名が参加した。合計１２名の児童が参加した。

（３）本授業の概要

１）授業内容

①題材名「紙ひこうきで遊ぼう！」

②目標：自立活動より

a. それぞれの楽しみ方が認められ、安心して活動に参加できる。【２心理的な安定－（２)】

b. 他者とのかかわりを育てる。【３人間関係の形成－（１)】

c. 目的に合わせて意図的に身体を動かすことができる。【５身体の動き－（５)】

d. 遊びの中で個々の表現による「やり―とり」を育てる。【６ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ－（１)】

自立活動に何か自分でものを作りそれを使って遊ぶというような活動をしてみたいと考え、この「紙ひこうきで遊ぶ」という活動を考えた。この活動では、紙ひこうきを作るにあたってそれぞれの児童の工夫を見られたり、ただ紙飛行機を飛ばすということだけでなく、紙ひこうきを使って自分たちで遊びを発展することができる。その中で、他者との関わりを持つことができると考えられる。ここでは児童の工夫や児童との関わりを持ちながら楽しめる活動にしていきたい。

③本時のねらい

a. 楽しく活動に参加することができる。【2 － (2)】

b. 紙ひこうきに興味・関心を持ち、工夫して作ったり、飛ばしたりすることができる。【5 － (5)】

c. 紙飛行機というﾂｰﾙを通して他者と関わり、やりとりしながら遊びを展開することができる。【3 － (1), 6 － (1)】

④活動の内容及び配慮・手立て

活動内容	児童たちへの配慮・支援の手立てなど
０．体育館へ移動する １．活動の内容を知る (5 分)	・紙ひこうきを作ったり飛ばしたりしたくなるように紙ひこうきの見本を提示。 ・人の顔に向けて投げないようにするなど注意事項を確認する。 ・活動の場所と時間の確認する。
２．紙ひこうきを作って遊ぼう (30 分) 〇作る、飛ばす、遊ぶ ・作りたい紙ひこうきを工夫して作り、実際に飛ばしてみる ・せ～の！で一斉に飛ばしたり、どこまで飛んだか競ったりする ・紙ひこうきを飛ばして箱に入れたり的あてしたりする	・紙ひこうきを作る場と遊ぶ場を設定する。 ・作ることから始めてもいいし、見本の紙ひこうきを飛ばすことから始めてもいい。 ・紙ひこうきを作るのに難しそうにしている児童に対し補助をする。 ・紙ひこうきにすぐに取り組むことが難しい児童はその児童の興味・関心を糸口に関わりながら紙ひこうきとの接点や出会いの機会を探る。 ・箱や網などの道具は初めから出さずに、児童の遊びの展開をみながら中盤以降に出す。 ・児童同士、児童と支援者が紙ひこうきを通じてコミュニケーションを取れるようにする（一緒に飛ばす、的あて、網や箱でキャッチ、当てっこ等)。
３．振り返り (5 分)	・児童が自分の感想などを言いやすいように言葉かけをする。 ・なるべく多くの児童に感想などを言ってもらえるようにする。

⑤準備するもの
紙ひこうきを作る用紙（折り紙、Ａ４用紙、画用紙大・小）、クーピー１２色２セット、マジック８色入り２セット、紙ひこうきの作り方を書いた本、段ボール箱１つ、たらい３つ、的になるもの、虫取り網（２本）、活動のタイトル、見本の紙ひこうき、はさみ、セロハンテープ

⑥場の構造

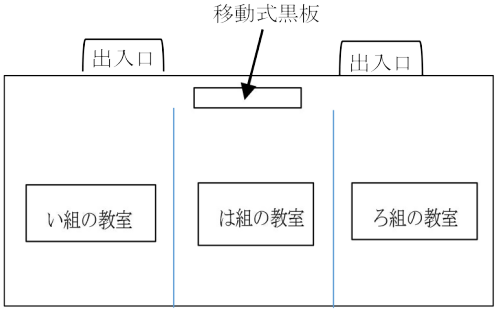

図１　特別支援学級

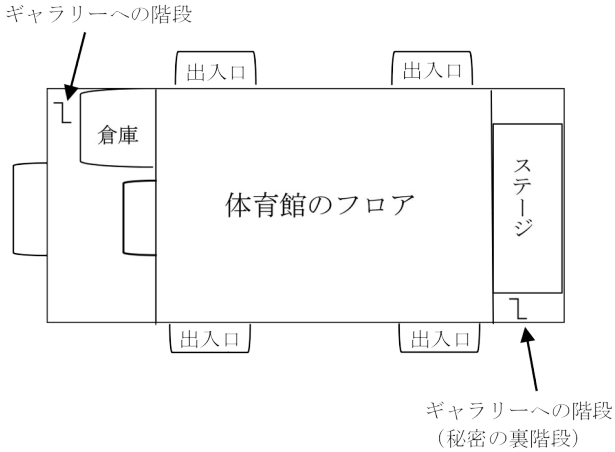

図２　体育館

（５）分析資料と分析方法

以下の２種類の資料を分析の対象とした。それは、1）授業終了後に記載した筆者の実践記録、２）授業のビデオ記録である。上記２種類の記録からＡ君の参加のかたちとそれに対する他者の関わりのエピソードを中心に取り上げエピソード記述し、質的な考察を行う。

２．経過

実際に行った活動内容の順にＡ君の参加のかたちとそれに対する他者の関わりのエピソードを中心に経過を記述する。また、Ａ君の参加のかたちの変容とそれに対する他者のかかわりを表１に示す。

１）活動の内容を知る

特別支援学級の子どもたちは、１校時が始まる前に、交流学級の朝の会に参加していたので、授業の始まる時間にまだ教室にいない子どももいた。ほとんどの子どもたちが集まり、１校時の始まるチャイムも鳴ったので、進行者Ａが授業を始めた。Ａ君は、みんなのいる教室の隣にある自分のい組の教室にいたが、進行者Ａが「Ａ君、今日よろしくお願いします」と隣の教室をのぞき見て声をかけていた。進行者Ａが今日の活動内容は紙ひこうきであることを話した後にＡ君が、みんなのいる教室に入ってきた。そして、そのまま前を通り過ぎて、今度は隣のろ組の教室に行った。

２）体育館へ移動し集まる

体育館への移動の際、みんなが並んだ列にＡ君は並んでおらず、みんなと一緒には行かなかった。

進行者Ａや支援者Ｂ、Ｃらが体育館に着くと、いつの間に来たのか、Ａ君は、体育館のステージの中央に座ってこちらを見ていた。進行者Ａが「すご～い！待っている人がいる！」と言い、Ｆ君は「幽霊がいる！」と驚いた反応をした。みんなより先に来て、驚かせたかったのかもしれないと支援者Ｂは思った。「Ａ君もおいで～」と進行者Ａが声をかけると、ステージの側面の方に走っていった。

みんなが集まってくると、Ａ君は上のギャラリーに姿を見せた。みんなが集まっている一番近い位置にいて、みんなの様子を見ていた。Ａ君はこちらに意識はあって、関わりたいのかなと思った。Ｇ君が「あ、また幽霊がいる」と言い、それを聞いて上を見たＪさんは「キャ！」と怖がる声を出しながらも楽しそうな表情をしていた。進行者Ａが「Ａ君、上から見ててね」と声をかけると、Ａ君が「ここはあなたたちの墓場だ」「まずはＤ君から葬ってやる」と言って、Ａ君のファンタジーの中からみんなに話をしていた。Ｆ君が、「また分身の術使ったな」と上にいるＡ君に言って、Ａ君のストーリーに溶け込むような反応をしていた。

３）紙ひこうきの材料や作り方、遊び方を知る

進行者Ａが「分身の術を使っているＡ君はちょっと置いておいて、紙ひこうきのお話をします」と実際の紙ひこうきを見せたり、材料の紹介をしたりすると、子どもたちは興味をもって見て、話を聞いていた。上のギャラリーにいるＡ君の「キ

ャー！」という叫び声が何度か響いた。支援者Ｂは、誰かに気づいてほしいのだろうなと思った。Ｊさんだけが、その声に反応してＡ君のいる場所を指でさして見ていた。担任Ｃが、叫び声をあげるＡ君に「Ａ君、場外だよ～」と声をかけた。

「Ａ君みたいに紙ひこうきに絵を描きたい人はクーピーもあります」と進行者Ａが道具についても紹介した。Ａ君は話の間も上のギャラリーにいて、仰向けに寝て足を柵のところに上げていた。その様子を見て支援者Ｂは、みんなが紙ひこうきの話に注目しているから、退屈してそんなふうにしているのかなと思いながら見ていた。

４）紙ひこうきを作ったり、飛ばしたりして遊ぼう

紙ひこうきの活動が始まって、支援者ＢはＡ君のいる上のギャラリーに紙ひこうきを飛ばしてみようと思った。支援者Ｂは、紙ひこうきは相手と離れていても飛ばすことができるのでいいなと思った。支援者Ｂが飛ばそうと構えると、Ａ君はまんざらでもなさそうに興味ありげにこちらを見ていた。届いたらキャッチしてくれそうだった。支援者Ｂは何度かチャレンジしたが、紙ひこうきはＡ君のいる上のギャラリーまでは届かず、ひゅるひゅると落ちてしまった。Ａ君がその様子をずっと見ていたので、届かなかったのが残念だったが、やっぱり興味はあるのだろうなと思った。

その後、ほとんどの子どもたちは紙ひこうきを作り始めたのだが、気づいた時にはＡ君は上のギャラリーからどこか別のところへ行っていた。進行者Ａが大きめの声で「あれ、いなくなってる～。また隠れ身の術使ったな」と言って見渡した。紙ひこうきを作っていたＢ君が、「あ！いた！」とステージの方にいるＡ君を発見した。Ａ君がみんなの作っている場に近づいてきて、ビデオ撮影者を後ろから「わ！」と肩を触って驚かせていた。

進行者Ａに、Ａ君がギャラリーを指さし「さっきあそこから足しか見えなかったでしょ」と言った。進行者Ａが「足しか見えなかった」と言うと、嬉しそうにしていた。おそらく、足しか見えないことで心霊現象を再現し怖がらせたかったのではないかと支援者Ｂは思った。進行者Ａが「Ａ君のところに飛ばそう」と言って紙ひこうきを飛ばした。Ａ君は、みんなの作っているところに来てその様子を少し見ていたが、すぐにどこかに行ってしまった。支援者Ｂは、さっきまでここにいたＡ君がいないなあと思い、すぐ近くにあった非常用の出口を開けると、そこからＡ君が体育館の入り口の方へ行った後姿が一瞬見えた。また戻ってくるだろうと思い、後追いはしなかった。

支援者Ｂは正面入口へ向かった。少しすると、案の定、正面入り口からＡ君が入ってきた。支援者ＢがＡ君のところに行くと、「きょ、きょ、きょ、教頭先生が～～～～！！」とホラーものの何かを演じているように私にすがりついてきた。そうしたら、入口の横のギャラリーへ行く階段から本当に教頭先生が降りてきた。支援者Ｂは、よく人を見ているなと思った。ファンタジーと現実が入り混じっていた。そして、Ａ君が体育館に入ってきて、「きょ～～～と～～～～う！！」と叫んで、バタリとうつ伏せに倒れこんだ。

その後、起き上がって、数人が紙ひこうきを飛ばしているところにＡ君が来た。進行者Ａが変わった形の紙ひこうきをＡ君におすすめすると、それに興味を示し何度か飛ばした。あまり長くは続かず、Ａ君は倉庫に入っていった。倉庫に隠れて、「キャーーー！」と叫んでいた。おそらく何かドラマ仕立てのような、殺人事件や幽霊などの怖い話に出てくるようなそんなイメージの叫び声を演じているようだった。扉を開けているときがあって、そのタイミングで支援者Ｂが行くと、パタンと扉を閉めて、でも何やら倉庫の中から言っているので、扉の穴に耳をつけてＡ君の声を聴くと、何か言った後に、また「キャーーー！」と大声で叫んだので、耳が痛かった。「耳が痛いよう」と伝えると、「ごめ～ん」と謝っていた。

Ａ君が扉を開けた時に、支援者Ｂが紙ひこうきを投げ入れた。紙ひこうきはＡ君のいる倉庫に入ったがまた閉めた。でも、表情は嬉しそうにしている。また、次開けた時だったと思うが、担任Ａも来て、Ａ君に紙ひこうきを投げた。紙ひこうきを意識して開けたり閉めたりしているようだった。

そのあと、倉庫から出てきて、担任Ａが渡した紙ひこうきを飛ばしていた。Ａ君が飛ばした紙ひこうきを取りに行って、再び投げていたが、少し経つと、また倉庫の中に入って行った。担任Ａは後追いせず、違う子どもと関わりをもっていた。Ａ君は、倉庫を開け閉めして、音を出していた。今度は担任ＣがＡ君の入っている倉庫に行くと、Ａ君が「ぎゃあ～～」と言いながら出てきて、担任Ｃと一緒にみんなが紙ひこうきを飛ばしているとこまで来て、死んだふりみたいに、再びばたりとＡ君が倒れ込んだ。そんなＡ君に担任Ｃが、こちょこちょをしてくすぐると、Ａ君が笑って転げ、立ち上がって逃げた。そして、すぐにまた倒れ込んでいた。Ａ君の倒れ込みに誰も反応しなかったが、Ａ君は顔を上げ起き上がり、また、近く

の非常出口から外に出ていった。

再び、体育館の正面入り口から入ってきて、体育館の入り口の扉を閉め、心霊現象を起こしているように扉を数回叩いて、音を出していた。そして、「キャーーー！！」と何度も叫び声をあげ、扉から体育館へ入ってきた。その近くにいたビデオ撮影者が、Ａ君が体育館に入ってきたのに気づいて、「死体が生き返ったぞ」とＡ君に声をかけた。Ａ君は、ビデオ撮影者に「あのさ、あのさ…」と怖さで声を震わせたような演技をしながら、体育館の扉の方を指さして、「変な人が来る！変な人が来る！」と言った。ビデオ撮影者が、「誰が来るの？」と聞き、扉の方に行くと、Ａ君が扉の隙間から覗き、「こ、校長先生！校長先生！」「みんな隠れて～！」と怖そうな演技をしつつも、手を叩いて楽しそうにしていた。Ｆ君が、それを見て扉を開け、誰がいるのか見ていた。Ａ君は隠れるためなのかその場から離れていった。

次に支援者ＢがＡ君を見た時は、Ａ君が担任ＡとＢ君と３人で、紙ひこうきで当てっこしていて、紙ひこうきが当たった人を「捕獲」と言って、Ａ君が捕まえていた。支援者Ｂも混ざり、担任Ａ、Ｂ君の４人で紙ひこうきの当てっこをした。紙ひこうきを投げて当てたり、投げずに紙ひこうきでタッチしたりしていた。

そのあと、Ａ君はステージのところでＣ君と関わりを持っていた。「Ｃ、あっかんべー」と言ってＡ君があっかんべーをし、それを見てＣ君が同じように「あっかんべー」をしたり、Ａ君がＣ君を捕まえたり、Ｃ君が逃げたりしていた。Ａ君はステージから飛び降り自殺のような飛び降り方で降り、床に倒れこむということも何度かやっていた。支援者Ｂから見ていると誰かに反応してもらいたくてやっているように見えた。

その後、Ｋ君が、いじめっ子役になって「あいつ、転校生だぜ。みんな、いじめようぜ」とＡ君を追いかけて、紙ひこうきを当てようとしていた。いつもおとなしく、緊張しているような姿を見ることが多いＫ君がいじめっ子役をするなんて、支援者Ｂはとても微笑ましくその様子を見ていた。しかも、Ｋ君は他に子分役も引き連れていた。Ａ君も嬉しそうに笑顔で逃げ回っていた。

最後に予定にはなかったが、先生からの提案で、みんなで２階のギャラリーから紙ひこうきを投げようということになったとき、Ａ君が「秘密の階段があるんだよ」と上にみんなで行くことを嬉しそうにしている言動があった。先生方もそれを聞いていて、いくつかある階段のうちＡ君が言った秘密の階段の方から上がろうかということになった。進行者ＡがＡ君に「これからみんなで２階のギャラリーに行くからそのときにＡ君が秘密の階段教えてあげて」と言うと、Ａ君が「うん！いいよ！」と張り切って、階段の方に走っていった。その秘密の階段は、体育館のステージの側面にあり、そこに行かないと見えないところにあり、Ａ君の言うように秘密のようだった。みんなで上のギャラリー上がって、そこからみんなで一斉に紙ひこうきを飛ばした。

５）ふりかえり

ふりかえりでみんなが集まったとき、Ａ君も自分の紙ひこうきを持っていて、みんなの輪の中にいた。そして、何度か紙ひこうきを飛ばしていた。飛ばした紙ひこうきをＨさんが気付かず踏んでしまったときに、「あ、僕の紙ひこうき」と踏まないでよといわんばかりに、Ａ君がすぐに床から拾っていた。

みんなが集まり、進行者Ａが「感想発表したい人いますか」と尋ねると、Ａ君は１番に手を挙げていた。Ａ君が当てられると、「お知らせがあります！」とＡ君。進行者Ａが「お知らせがある？」と聞き返すと、Ａ君は「やっぱり、後で」と言った。そして、「みんなに秘密の裏階段を公開できた」と嬉しそうに報告していた。

表１　Ａ君の参加のかたちの変容とそれに対する他者のかかわり

参加の変容	活動内容	Ａ君の参加のかたち	Ａ君に対する他者の関わり
周辺で過ごしながらの参加	１　活動内容を知る	・隣の教室にいる。 ・途中入ってくるが、横切ってまた隣の部屋に行く。	隣の部屋にいるＡ君に「Ａ君今日宜しくね」と進行者Ａが声かけする
	２　体育館へ移動し、集まる	・みんなの列には並ばず別ルートから体育館へ行く。 ・誰よりも早く来て、ステージの真ん中に座りみんなが来るのを待っている。 ・みんなの集まっている一番近い上のギャラリーにいる。 ・「ここがお前たちの墓場だ」「あさうみから葬ってやる」とファンタジーに入っている。	・進行者Ａ「待っている人がいる～」と言う。 ・Ｇ君「幽霊がいる」Ｊさん「キャ！」 ・進行者Ａ「上から話聞いていてね」 ・Ｆ君「また分身の術使ったな」
	３　紙ひこうきの材料や作り方、遊び方を知る	・上のギャラリーから「キャ～～」と怖いことや事件でも起こったかのように何度か叫ぶ。 ・仰向けに寝て、足をギャラリーの柵にあげている。	・進行者Ａ「分身の術を使っているＡ君はちょっと置いておいて今日の紙ひこうきのお話をします」 ・Ｊさんが Ａ君の声に反応してＡ君のいる場所を指さす ・担任Ｃ「Ａ君、場外だよ～」 ・進行者Ａ「Ａ君とか、紙ひこうきに絵を描きたい人にはクーピやマーカーも準備しています」
体育館のフロアから出たり入ったりの参加	４　紙ひこうきを作ったり、飛ばしたりして遊ぼう	・上から降りてきて、ビデオ撮影者を後ろから驚かす。 ・進行者Ａに、「下から足見えた？」と尋ねる。 ・倉庫に入り、「キャーー」と叫ぶ。 ・扉を開けたり閉めたりする。 ・担任からもらった紙ひこうきに興味を持ち、何度か飛ばす。 ・担任Ａ、Ｂ君と紙ひこうきを使って当てっこする。「確保」と友達に紙ひこうきを当てる。 ・友達に紙ひこうきで当てられそうになり笑顔で逃げる。 ・はりきって「いいよ」とすぐに階段の方へ行く。 ・みんなは準備できておらず着いてきていないが、階段の方へ先に行ってしまう。	・ビデオ撮影者「びっくりした～」と驚く。 ・「見えたよ」と伝える。 ・支援者Ｂが、倉庫の扉が開いたタイミングで紙ひこうきを投げ入れる。 ・倉庫から出てきたＡ君に変わった形の紙ひこうきを担任が渡す。 ・Ｋ君、Ｊさんが、Ａ君に紙ひこうきを当てようと追いかける。 ・進行者Ａが「2 階のギャラリーへ行くから秘密の階段でみんなを案内してくれる？」とお願いする。 ・Ａ君は先に行くがみんなはまだ準備ができておらず。
同じ場で参加	５　ふりかえり	・集まっているところで、紙ひこうきを飛ばす。飛ばした紙ひこうきが踏まれ「僕の紙ひこうき」と踏まないでというように拾う。 ・感想発表では１番に手をあげる ・感想発表では「お知らせがあります」と言うが「あ、やっぱり後で（にする）」「秘密の裏階段をみんなに公開できた」と嬉しそうに伝える	・Ｈさんが Ａ君の飛ばした紙ひこうきを踏んでしまう。 ・Ａ君に２番目に感想を言ってもらう。

４．考察

Ａ君の参加のかたちの変容過程としては、１活動内容を知る、２体育館へ移動し集まる、３紙ひこうきの材料や作り方､遊び方を知るの場面では、Ａ君はみんなのことを意識しつつ、みんなのいる教室・体育館のフロアの周辺で過ごしながら参加し、４紙ひこうきを作ったり飛ばしたりして遊ぶ場面では、体育館のフロアから出たり入ったりしながら、みんなに近づいたり離れたりしつつ、Ａ君は自分のファンタジーの世界から関わったり、紙ひこうきを飛ばしたりしていた。５のふりかえりの場面では、自分の紙ひこうきを持って、みんなの円の中に加わり､感想発表で最初に手を上げ、発表していた。初めは、教室・体育館周辺にいて参加し、それから徐々に集団に近づき体育館のフロアから出たり入ったりしながら参加し、最後のふりかえりでみんなと一緒に参加するという過程をたどったことが明らかになった。

そのときの他者のＡ君への関わりとしては、全体的に子どもたちも支援者も、Ａ君を集団に入れようとする声かけや集団の場にいないことを否定的に捉える言葉ではなく、肯定的で、Ａ君の興味･関心に応じた声かけをしている。例えば、活動の内容を説明しているときに、みんなの集まっている部屋ではなく隣の部屋にいるＡ君に進行者Ａが「今日よろしくね」と声をかけたり、みんなの列には並ばず別ルートで体育館へ行ったＡ君が、先に体育館で待っていると、「すご～い！待っている人がいる」と進行者Ａが言ったり、子どもたちも「幽霊だ」「分身の術を使ったな」と反応している。特に、Ａ君の興味に合った子どもたちの発言は、日頃から教師たちがＡ君の参加のかたちを肯定的に捉え、関わっていることの表れではないかと思われた。

武田（2015）は集団参加に苦手さのある広汎性発達障害の子どもの事例から、集団支援の活動内容を行うか行わないかの２択ではなく、行ってもいいし行わなくてもいい、別の場所でやってもいいと、子どもたちに合わせて枠組みを作っていったことが、集団参加をするようになったことに重要であったと述べ、子どもが自分で選んで、参加したり参加しなかったり、別の場所で行ったりするなかで、みんなと一緒にいることが楽しいという体験を積み重ね、その結果、自ら集団の部屋でみんなと活動するようになっていったことを報告している。

また、浦崎ら（2010）は大切なことは、みんなを集めることでもなく、説明を一斉にすることでもないと述べ、大切にすべきねらいは、自然に楽しみの世界に子どもたちが自ら入っていくことであり、紙ひこうきを飛ばすことで「他者とともにある場」が生まれることであると述べている。

本実践においても、周辺にいるＡ君を活動への参加のかたちと捉えつつ、みんなのいる場に来たときに、Ａ君との関わりをどのように作っていくか、紙ひこうきとの接点をどのように作っていくかを模索しながら関わったことで、最後のふりかえりのときにＡ君が自分の紙ひこうきをもって、自らみんなの集まっている場に来て、感想発表したことに繋がったのではないかと考えられた。みんなと同じ場所に集まったり、列に並んで一緒に行動したりすることを求めていたら、このような過程をたどることは難しかったのではないかと考える。

５．引用文献

武田喜乃恵（2015）「トータル支援教室に参加した発達の気になる男児の７年間の変容過程」九州地区国立大学教育系・文系研究論文集３巻１号 No.19

武田喜乃恵（2013）「広汎性発達障害児との＜能動－受動＞のやりとりにおける変容過程
―トータル支援教室の集団支援から―」琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要４号 ,63-77

浦崎武・武田喜乃恵・崎濱朋子・瀬底正栄・宮脇絵里子（2010）「発達支援教育に於ける実践力養成システムの構築と離島・へき地への展開　～八重山への出前トータル支援教室について～」琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要第１号 ,65-80

浦崎武・武田喜乃恵・瀬底正栄・崎濱朋子・（2014）自閉症スペクトラム障害児・者の他者への＜向かう力＞と＜受け止める力＞の相互作用―TSG を通した＜能動－受動＞の相互作用に関する支援教育的検討― 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要５号 ,1-10